
闇を放つ蠟燭

naolog

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

闇を放つ蠟燭

【コード】

N6943B

【作者名】

naolog

【あらすじ】

蠟燭を使った放火。その犯人のその後は…。今回僕が初めて書いた小説です。短編。

第一章（前書き）

この小説は著者の創作^{フィクション}であり、実際の人物、事件、場所等とは一切関係ありません。

闇を放つ蠟燭

第一章

私は初めから解^{わか}っていた。

こんな事^{なん}をしても何の解決にもならないことを。

彼らの悲しみや怒りは私に向けられ、やがては裁^{さば}きを受けるであろうことを。

失うことは、大きな力になるということを。

しかしその夜に私はそういった思考^{そぼ}を持ち合わせてはいなかった。また、不幸なことに私の側^{そば}には数多^{あまた}の蠟燭^{ろうそく}と十分な量^{じゅうぶん}の灯油があった。

三月七日のことである。

私は放火犯となった。

第二章

私は蠟燭に魅^みせられていた。最近は様々な色と形の蠟燭が売られているらしい。しかし専^{もっぱ}ら私が好^{この}んでいたのは、真っ白い、所謂^{いわゆる}“普通の”蠟燭である。五年前、私の部屋に専用^{専用}に設置した棚には、月に数百本ずつ蠟燭が増えていった。今年の三月のアタマの時点でその数は二万本を越えていたと思う。

確かに、蠟燭は火を点^{とも}す。しかしそれ自体が発火し、火を点している訳ではない。蠟燭の芯になっている燃^{よりいと}糸が徐々に燃えているだけである。恐らく。

通常放火と言えばマッチやライターで燃料に着火させるものであろう。蠟燭で着火など想像するのも難しいのではないだろうか。明らかに効率が悪いだろう。

私が蠟燭を道具に使ったのは、単純な動機からである。自分の点けた火が建物に燃え移る瞬間は見たくなかったのである。見れば確実に後悔する。罪悪感も膨れ上がるであろう。そう云った点で蠟燭は時間的なズレを持たせてくれた。

燃え上がる炎を見ることに抵抗はないが、それに因^よって引き起こされる人々の苦しみは見たくなかったのである。狡^{する}いものだ。

何処かで聞いた話だが、放火と云う犯罪には女性が多いらしい。心理的な理由なのか、それとも身体的な理由なのかは解らないが……。どちらにせよ、彼等^{かれら}の根城は今や廃墟と化してしまっただのである。誰でもない、私の所^せ為^いで。

第三章

「なんてこつた…」

「しつかり丸焼けだな」

「誰がこんなことを？」

「さあな。敵が多すぎて見当も付かねえ」

四人の少年が焼けた小屋を見ながらぼやいている。まだ小学生と云う感じの風貌である。彼等是用がなければこの小屋に来ては遊んでいた。

現在時刻は放課後に当たる午後四時過ぎ。

今日も彼等は学校が終わるといつもと同じように此处へ集まった。そして啞然とした。

いつもと全く違うその見慣れない建物に。

小屋は全焼していた。午前中に検証やら騒ぎは収まっていたので、彼等は情報を得られなかったのだ。灯油が撒かれていたことから、放火の疑いが強かった。

小屋は形こそ崩れていないものの、外壁は墨になっっているようだった。内部には、いくつかの椅子と一つ机があるだけだったが、それらは辛うじて原型が解る程度だった。

彼等の中には入ってみた。彼等は驚いた。

小屋の中には不気味な蠟燭が立てられていた。

否、蠟燭が不気味なのではない。その数が不気味さを醸し出しているのだ。

彼等は怯えた。

「こ、この蠟燭は…？」

「知らねえよ」

「何で小屋は真っ黒なのに、蠟燭は白いんだ？」

「…気味が悪いよ。ってか、もう此処は捨てて新しい所探そうぜ」
ただ焼けただけの小屋であれば、好奇心旺盛な少年達の秘密基地

として利用されたのであろう。しかし、そこには蠟燭があった。それは、彼等をすぐに追い払った。

使われることのなくなった焼けた小屋には、夕闇が迫っていた。

第四章

私は水鉄砲を構えた。彼等の根城は丘の上にある。大木の下である。木造の小屋、それが私の標的ターゲットであった。

五分前　小屋に侵入し、蠟燭を設置して逃げてきた。窓の棧、屋根の上、庭、棚中に台を置き蠟燭を立てた。これは云わば飾りである。本命は床に配置した。火はライターで点けてきた。今日は風もないし、湿度も低そうであるから、消えることはないだろうと思われた。

水鉄砲のタンクには水の代わりに灯油が入っている。暗闇で見ると限りその差はない。

どうせ周りも燃えるだろうから多少のズレは構わない。大木も燃えた方が華やかだろうとさえ考えていた。気を付けなければならぬのは蠟燭自体に灯油を当てないことだけである。火が消えたり、今から火事が発覚すると蠟燭を使う意味がなくなってしまふ。

よく空気を圧縮させ、思い切って撃った。五十メートル程離れた草叢くさむくからの射撃である。

まずは小屋の壁を狙った。外壁は殆ど灯油塗れまみになった。そして開けておいた入口から真っ直ぐに撃った。そのライン上の机や椅子の上に蠟燭は置かず、それを囲むようにして床に蠟燭は並べた。恐らくその蠟燭で着火するだろう。

その後私は一目散に自宅へと帰った。今頃蠟燭の下には家具から垂れてきた灯油が広がっているはずだ。

部屋の窓から丘を見ると、まだ蠟燭の小さな灯あかりが数十個確認できた。

徐々に背の低くなる蠟燭。やがてその頂上にある火は、灯油と接するだろう。

あれが纏まとまった一つの火になるのはいつ頃だろうかなどと思いな

闇を放つ蠟燭

がら私は眠りに落ちていった。

第五章

翌朝、窓から見た景色は蠟燭のそれで綺麗に彩られてはいなかった。大地を照り輝かせる太陽の所為ではない。丘の上には最早黒いモノが乗っているだけだったのである。意外にも、大木は燃えなかつたらしい。小屋は誰にも気づかれないまま、一晩のうちに静かに燃え尽きてしまったようである。ここで漸く私は悪いことをしたんだと云う当たり前の罪悪感を自覚した。

取り分け彼らに怨みがあった訳ではない。彼等を焼き殺したかったのでもない。だからこそ、だからこそ彼等が白昼根城にしている小屋を狙ったのだ。深夜なら彼等はいまい。そのため、建物は全焼であつたが付近に住宅もないので死傷者は零であつた。「ついカツとなつてやった」「むしゃくしゃしてやった」という訳でもない。私は至極落ち着いていたし、そうかといって“火遊びがしたくて”やった訳でもない。

結局の所、蠟燭に囚われていたのだと思う。

蠟燭を無意識に愛し、いくつもの蠟燭に囲まれた生活をしていた。それを使って罪を犯すことは、その呪縛から逃れたかつたのかもしれない。

しかしそれも叶わなかつた。寧ろ綺麗だとさえ見えてしまつていた。新たな魅力を感じていたのだろうか。そんな自分に少しゾツとする。

こんなことをして何になつたのだろう。私は放火犯になつてしまつた。

自首…？逃亡…？それともこのまま連続して…？兎に角、褒められる類のことではないし、どれも違うような気がした。

私はこれからどうするべきなのだろうか。

第六章

彼等はどうしただろう。彼らは……。思案を続けるうちに、夜がやってくる。

毎日毎日、来る夜。

見慣れている筈ではあるが、この暗い闇に体が慣れることは永遠にないだろう。

その後私は暗い部屋中に蠟燭を飾り付けた。段ボール箱に仕舞っていた凡そ二万本の蠟燭。全て使い切ってしまったかった。

その一本一本に火を点す。綺麗だった。仄かな橙の灯りが私を暖めてくれた。

しかし空気は明らかに淀んでいる。少し苦しい気もする。ふと壁を見た。蠟燭の光で私の体の影が壁に映っている。

闇だ。

蠟燭に因って闇が生まれている。

怖い。

ゆらゆらと揺れている。

恐い。

蠟燭を点さなければそれはそれで暗い部屋だったのだが、部屋に明るい部分が出来たためその明暗は広がってしまったのだ。

私は気分が悪くなった。

本来明るさは人を安心させるものである。暗闇が怖くて蠟燭を点けて光を求めた。

それが何故。

何故闇を放っているのだ。

逃げ出そうとしたその時、足元に何かがぶつかった。

昨夜使った灯油の残りが入ったポリタンクだった。
気づいた時には既に灯油は床に撒かれていた。
一瞬のうちに部屋は熱くなった。
短い蠟燭が床近くにあったのだろう。

おお。明るい。

闇が消えた。

これで安心じゃないか。

良かった。良かった。

眩^{まよひ}い光と薄れ行く意識の中で私は安堵感に包まれていた。
蠟燭が闇を放つ訳ないじゃないか

第七章

三月九日の朝、奇妙な家が発見された。

一戸建てなのだが、二階部分が全焼しているにも関わらず、一階は全くと云って良い程無事だったのである。

二階の一室から、住人と思われる男性の遺体が発見されているらしい。

なんとその部屋には蝋燭が何本もあったそう。全てが使用された形跡があり、火事の原因はこれと見られている。

蝋燭は何故か新品同様の白さだったと云う。

まるで部屋全体に黒い部分を放出してしまったかのような光景だったとも云う。

近所に住む者は、一昨夜にあつた丘での火事と関連付けて「これは連続放火ではないか」と口々に不安を表した。

その遺体の彼自身が放火犯であつたのだが。

彼をそれと知っている人がいたとしたら、今度は復讐に遭つたと云うかもしれない。

否、復讐には遭つていとも云える。

蝋燭を使つて罪を犯した上、その蝋燭を全て処分しようとしていたのだから。

蝋燭の復讐に遭つて彼は死んだと見ても強ち間違いではないのかもしれない。

焼けた小屋に意思があれば、復讐したかもしれない。

それは解らないけれども、受ける者が感じるものなのである。

これは“闇を放つ蝋燭”と呼ばれる不思議な物語である。どこか

らともなく聞かれ、伝わっている話である。

本当に物に意識があるのかどうかは解らないし、蠟燭が闇を生むのも科学的な理屈があるのかもしれない。

人は時に何か一つのこと凝ったり拘ったりする。

惑わされたり、狂っていた、などと云って振り返ることが出来るのは幸せなことだろう。

それに気づかず何かを失ったり、他人に迷惑を掛けたり、取り返しの付かないことが起こる場合も多々あるだろう。

“モノ”の大切さ、それとの関わりを考えるのもたまには良いかもしれない。

(了)

第七章（後書き）

“彼ら”と“彼等”の違いは意図的なものです。勿論指しているものは違います。

また、章の時間の進み方が少し複雑です。そこは読者の皆さんがうまく掴んで下さい。

次回をもっとミステリーな小説を書けたら良いなと思います。読んでいただいた方々、ありがとうございます。

この小説は“推理”から“ホラー”にジャンルを移動させました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6943b/>

闇を放つ蠟燭

2009年6月27日21時50分発行